

音楽の授業で子ども同士の協働を高める手立て

言葉を介さなくても音や音楽でコミュニケーションを取り、楽しそうに学び合っている子ども達の姿を見ると嬉しくなります。「一人でもできるけれど、友達と一緒に音楽活動するとさらに楽しい！」といったことが音楽科の特質であり、良さでもあります。新学習指導要領の学年の目標の中で、(3)「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標には、「協働して音楽活動をする楽しさ」について示されています。日頃の授業における子ども同士の協働を高めるための取り組みを紹介します。

音楽
音楽専科
内垣 美佳



(1) 中間発表で子どもの思考をつなぐ

《事例1》第4学年「言葉でリズムアンサンブルをつくろう」

「呼びかけと答え」や「音の重なり」を使って、4文字の言葉でリズムアンサンブルをつくる活動です。男女混合4人グループでアイディアを出し合いながらテーマ(曲名)を選んでつくります。

リズムアンサンブルをつくり始める前に、使えるリズム、「呼びかけと答え」と「音の重なり」を必ず使うことをあらかじめ伝えておきます。子ども達はこのルールを意識してつくろうとしますが、どのように工夫して良いのか、なかなかイメージがわからないグループも…そこで、「出来たよ!」と言って一番に出来上がってきたグループの曲を中間発表させます。すると、仲間のつくった曲に影響を受けて、「あ~そうするのかあ」「もっとこんなこともできるかも」と他のグループが気付き、急にどのグループも活動が活発になります。つい、発表は全グループ一斉にさせたくりますが、出来たタイミングで中間発表をさせることで、つくったグループは達成感をすぐに感じる事ができ、さらに「もっとつくりたい」という意欲を高めることにもつながります。

(2) グループを少しずつ合体! 仲間と声を合わせることで深まる民謡の魅力ー

《事例2》第6学年「郷土の音楽に親しもう」 教材:「串本節」

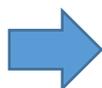
和歌山県の民謡「串本節」の歌唱の活動です。音楽を分析的に捉えることも大切ですが、まず、範唱を何度も聴いて真似ることにより、体験を通して民謡の音楽的な特性を感じ取ることができるようにした取り組みです。

はじめ、6人グループになって範唱CDを何度も聴きながら「串本節」を歌うことにしました。大きな声で歌える子どもがいるグループはとても楽しそうに声を合わせて歌うことができますが、恥ずかしがってなかなか声が出ないグループもあります。「串本節」の特徴を考えると、少ない人数で歌うよりも大勢で歌う方が歌えるようになるであろうと予想していました。子ども達の様子から「そろそろ人数を増やそう」と判断して、6人グループを合体して、12人で歌わせました。すると、「ハア オチャヤレ!」と楽しそうな「串本節」の音が響いてきました。楽しく歌う子どもの声が次々と他の子どもにも伝わっていく瞬間でした。授業の最後には、30人全員で声高らかに歌いました。

この実践は、日本の音楽ならではかもしませんが、子ども達の様子をよく見て、協働を高めるような環境を整えるのも教師の役割だと感じています。歌唱の活動前と活動後のワークシートへの記入例を紹介します。

歌唱の活動前

- ・古い音楽は苦手。
- ・意味が分からない。
- ・リズムが合わせにくくて難しい



歌唱の活動後

- ・声が低くても高くても地声だから歌いやすい。
- ・何回か聴いていると意味が分かってくる。
- ・速さがゆっくりでみんなでのって歌える。